

抑留中の労役は後遺症となつて

今も心身を蝕み続けている

広島県 藤森隆行

車窓から見たとき降っていた小雪も、舞鶴に着いたときにはすっかり止んでいた。爽やかに澄んだ冷気は、ひんやりとして、心地よく身の引き締まる感じがした。

海ひとつ隔てた凍土の大地で、日ごと夜ごと望郷の念に駆られ、翼欲しいと祈ったあの頃から、もう五十年もの歳月が流れてしまっている。

感無量の思いで舞鶴湾の岸辺に立った。辛うじて残る数本の杭が、さざ波の水面に苦むし朽ち果てて立つ姿もわびしく、僅かに棧橋の名残をとどめていてくれた。

五十年の歳月、訪れる人々に時の流れを語りかけていたのだろうか……。五十年は余りに長い歳月、薄れて

しまった記憶と、あまりの変貌に当時を偲ぶに術なく、ただ、時の流れに驚くばかりであった。

私が訪れたのは、棧橋復元の前年三月も半ばの頃。思い出多きあの引揚援護局は、工業団地に姿を変えていた。尽きせぬ回顧に耽り、時の経つのも忘れて立っていた。

広漠のシベリアから、日本海の海原を渡ってきた風は、冷たく心を刺した。

臉を閉じると水平線はるかにシベリアの大地が浮かんでくる。

勇ましい軍艦マーチに始まり、連戦連勝を報じていた大本営発表も、いつしか北に南に悲壮なる玉砕の報道が多く聞かれ、流れる「海ゆかば」のメロディーにも暗雲を感じた。

昭和十九年十二月一日。一年繰り上げされた徴兵に、勇躍兵役に就いた私も、復員したときは二十四歳になっていた。それもいつしか老いぼれて、今は齢七十四を数える。

抑留中のほとんどは炭鉱労役であった。

風がヒューと笛のように鳴いて、水気のない粉雪を夜目にも白く宙に舞い上げる。二番方の帰途は深夜の十二時を過ぎる。山道はアイスバーンのように凍てついている。滑らないよう足元に気を使って歩くのも、栄養不足の身にはとても疲れる。

この氷が解けて春になれば、きっと迎えの船が来てくれる……と、当てもないのに、儂い望みで待った。待つしかなかった。

入ソして三度春を見送り、今年もまたと、半ば諦めの夏が来たとき、待ちに待った帰国の知らせが、やっと届いた。

ナホトカの埠頭に接岸されていた、帰還船大郁丸の船尾に翩翩と翻る日の丸を見たときは、ジーンと胸を打たれ、大粒の涙があふれて落ちた。

日の丸は母国に見える、だから日の丸に涙する、軍国云々の思いなどかけられない。

唯ひたすらに母なる国が恋しかった。

昭和二十三年七月十六日。この日、私たちの梯団は日本の土を踏んだ。あの日の海はよく凪いでいた。甲板の右舷は人人の山ができていた。

祖国の山の美しい緑を、生きて見ることができた。夢ではない。万感胸に込み上げ、涙はとめどなく頬を伝って落ちた。

引揚援護局に入り、大の字に寝転んだ畳にすら、郷愁を感じた。一人静かに目を閉じ、覚めやらぬ喜びをかみしめていると、熱い涙が目尻を伝って畳に落ちた。

入浴案内の声がスピーカーに流れた。浴槽に首まで浸かり、思いつき手足を伸ばして幸せをいっぱい吸い込んだ。生きている喜びが沸々と込み上げてくる。何度も頭を洗った。強制されたソ連邦の垢(赤)を落とそうと、身体も赤くなるほど何度も擦った。染み付いているシベリアの臭いも汚れも、みんな根こそぎ落としたくて、何度も洗っては流した。洗いながらも自然と頬を伝う嬉し涙も一緒に流れた。

帰還の日から三日過ぎて、お世話になった援護局を

離れる日がきた。喜びを乗せた復員列車は、舞鶴の人々に見送られて、それぞれの故郷へ旅立った。京都で東と西に別れた。西下する列車が淀川の鉄橋を渡るころには、気もそぞろで落ちて座っていられなかった。

ガチャンと大きな連結音に揺さぶられて、列車は停まった。「おおーさかー、おおーさかー」。以前は気にもしなかったのに、駅名を知らせる声すらジーンと胸に沁み入るようだ。ホームに降りると関西弁が溢れている。

いまだかつて関西弁をこれほどしじみ聞いたことはない。方言の味をかみしめていた。駅前の一角に立ち並ぶバラックの辺りが賑わっていた。後で閩市と知った。

逞しい浪速商人のど根性は、戦禍の跡地に早くも息づき始めていた。なのに六十万を超える抑留者は、祖国の復興に汗することなく、あろうことか、ソ連邦の復興五カ年計画を手助けしていたとは、無念極まりない思いであった。

ちなみにそのときの私の服装は、旧軍隊の詰め襟型の上衣と、薄茶色した陸軍の飛行服の袴を履き、星章を剝がした旧軍の略帽に旧軍靴、雑のうと水筒をたすきがけにしている、一目で復員軍人と分かる服装であった。行き交う人々の服装と見比べて見たが、さほど見劣りはしなかった。それほどみな貧しい時代であった。

すっかり変わってしまった駅前周辺のたたずまいに驚いている私に近づいてきた婦人が、

「隆行と違うか？ 隆行やろ」「えっ、里姉さんか？ 里姉さんやな」思いがけないことで、びっくりすつ頓狂な声で念を押していた。

姉の名は里恵、小さいときから里姉さんと呼んでいた。早くに母と死別した私を可愛がってくれた姉に、あたりにかまわず思いっきり抱きついた。嬉しかった。復員して初めに会った肉親が姉だった。堰を切った涙が、抱きついた姉の肩を濡らしていた。

姉の家は幸いにも戦災を免れ、戦前のままのたたずまいで残っていた。家に入ると、姉がいつも食事をし

ていた席の後ろの棚に私の写真が置かれていて、陰膳がしてあった。おもむろにその写真を手にした姉は、「もう明日から陰膳も要らんなあ」と、誰に言うとなく漏らしていた。いつの日帰るか帰らぬか、生死のほども分からない弟の無事の生還を祈ってくれていた深い姉の愛情が無上に嬉しかった。

姉の愛情に泣いた初年兵時代のエピソードを一つ。旧満州で現地入営した当時の初年兵には、日曜外出などは予定表になかった。内務教育と基礎訓練に息つく暇なくしごかれていた。カラスの鳴かない日はあってもビンタに休みはない。

そんなとき姉から慰問袋が届いた。家族の配給を切り詰め、やり繰りした慰問袋であろう。千人針も一緒に入っていた。私が入営するときには会えなかったのが気になっていたとのこと、千人針を手に町角に立つ姉の姿が目につく。消灯後のベッドに潜り込み、姉の愛情をかみしめ咽び泣き出したのを思い出す。

初年兵にとって、消灯後のベッドの中は何よりの憩いの場であった。酒保に行く暇もない初年兵に、戦友

の古兵が黙ってベッドの中突っ込んでくれていた貴重な甘味品を、子供のように涙浮かべて食べた。古兵も初年兵のところに同じ経験をしたのだろう。

凄まじいビンタで、痛みを通り越し痺れて熱く火照る頬を撫でながら肉親を偲んで眠りにつくのも、ベッドの中であった。

初年兵時代やシベリアのあれこれの思い出しながら書いてみると、辛かったことも懐かしくなり、暇も熱くなる。

父も母も姉も兄たちも、みんなみんな先に逝ってしまった……。

大阪で勤めていた私は、後に広島へ転動していた。広島のある一日、街を歩いていて、すれ違いに声をかけられた。「藤森さん、藤森さんと違いますか？」誰かしらと振り向き、呼び止めた人を見たが誰か分からない。その人はニタニタして私が思い出すのを待っている様子。

「失礼ですが、どちら様でしょうか」「桑原ですよ」

と名乗られても、なお首を傾けている私に「スーチャ
ン炭鉱でトロッコを押していた桑原ですよ」

正直のところ、そこまで言われてもまだ分からなかつたが、それではあまりにも失礼なので「ああそうでしたか、それは失礼をしました、申し訳ありません」
復員してまだ一年ほどなのにスーチャンと言われても、思いつけない訳があった。

ロシア語の通訳が必要となり、徴兵前、旧満州のハルビンに住んでいたころ、近くに住む白系ロシアの娘との日常会話で覚えた程度のロシア語で、とても通訳はできないと再三辞退したが、他にいないとの理由で無理やり通訳をやらされた。

収容所に入ってから、日ソ両将校と私の三人で各作業現場を回り、作業状況を見ては双方の言い分を聞いて通訳していた。

彼らの目的はサボタージュの監視とノルマの強要であつて、日本の将校も私も一番嫌なことであつた。同じ抑留の身で労役している同朋に、彼らの言うノルマ強要の通訳はできない。通訳をしていて、何度こんな

ことで言い争いをしたことか、数え切れない。こんな争いが度重なり、後に私の炭鉱入りの起因ともなつた。

坑内の巡回で、ソ連将校と現場監督を相手に度々言い争う私を目にしては、いつも溜飲を下げ喝采していたのが坑内でトロッコを押していた桑原さんたちであつた。

興南に集められた四千人の部隊は、各原隊を解体され、千人単位の混成労働大隊に編成替えされていたので、収容所内でも顔見知りの原隊の人たちはごく少数であつた。私は通訳を首になり炭鉱に入ってから、帰国するまで本部で起居していて、各舎内への出入りもなく、知人もいなかった。

そんな訳で桑原さんに声をかけられ、名乗られても分からなかつた次第。しかし、それからは親しい付き合いが始まった。四十過ぎて補充兵で召集された桑原さんは、復員後すぐに結婚されていた。当時まだ独身生活をしていた私は、時々お邪魔をしては御馳走になつていた。

ある日、誘われて奥さんの実家へご一緒したとき「私の友人よ」と紹介されたのが縁で、貧乏世帯を持つことになったのが妻である。考えてみると、シベリアの炭鉱にいたとき、既に出雲の神様は私の連れ合いを決めていたことになる。そんな妻には四十年もの長い間苦勞ばかりかけ、幸せ薄く先立って逝った。今では喧嘩にもならない、写真を相手に話している。

近くを流れる川の堤防を、走り去る車の音が時折聞こえてくる寒い冬の深夜。どこの家でも今頃は深い眠りについていることだろう。

私は布団の上に胡座で座り、膝に枕を抱えてそれにもたれ、襟もとから全身を毛布と布団で包み込むようにして、一層厳しく冷え込んできた深夜の寒さを凌いで、苦しい辛さにじっと耐えていた。もう三晩にもなるか、思考力の薄れた頭でそんなことを思っていた。かなり憔悴しているのは自分でも分かった。

風邪をひくと熱が出て呼吸が苦しくなり、咳は止まらず続き、動悸に息切れ、今までにない症状で臥せる

ことが度重なった。

記憶は定かではないが、このような症状が現れたのは復員後十数年経ってからであったと思う。複数の町医者では慢性気管支炎とか喘息などの診断であったが、一人の医師が、気にするほどでもないと思うが肺に少し陰影が見られるので、念のため総合病院で精密検査を受けてみてはと紹介状を書いてくれた。

通院で一カ月余りかかってあらゆる検査を受けたが、医師が案じたような病（肺結核）ではなかったよいうで「半年後にもう一度来てみてください」と言われた。半年後の検査も前回と同じで、異常はないと言われた。異常ないと言われても治った訳ではない、同じ症状はその後も続いた。

昭和六十年のこと。広島の新聞に長期連載されていた「シベリア抑留」御田重宝編集員著を毎日欠かさず読んでいた。十一月十八日の記事を見て驚いた。「シベリア珪肺全国連絡協議会」事務局長山本泰夫氏（平成九年物故）の談話として、私が苦しんでいる病状に酷似した症状が記載されていた。

早速山本氏宛に、シベリア抑留当時の炭鉱労役の詳細と、苦しんでいる病状を便箋十数枚に書き、それを持って山本氏の住所を尋ねるべく新聞社へ御田編集員を訪れた。私の手紙を読まれた御田氏は快く山本氏の住所を教えてください、その上で、「藤森さんのこの手紙の内容を、今連載している『シベリア抑留』に載せたいのですが」との申し入れがあった。(十二月十八日の朝刊、私の手紙は長文のため、一部割愛されて記事になった)

私の手紙を読まれた山本氏からは、「手紙の内容からみて、恐らくシベリア珪肺に間違いないと思われるので、早々に申請手続きをされるように」と、規定の申請用紙数枚と、書き方手順などを懇切丁寧に説明された返事を頂いた。

その後入会した私と山本氏との文通は度々あって、その都度指導をしていただき、逐次準備を進めていた時、突然発病した。高熱で一時的失神状態になり、咳込み、喀痰、動悸、息切れ激しく、死ぬほど辛いものだった。胸水がたまっているとわれ、即日入院するこ

とになった。入院してからは連日、抗生物質の点滴や栄養補給の点滴、注射に服薬が続いた。回診は毎日あって万事行き届いたものであった。当然のことながらシベリアの医療とは比較にもならない、天と地の隔たりにあった。

余談ではあるが、スーチャン収容所の一隅を有刺鉄線で仕切り、将校集団が一時期収容されていたことがある。そこに収容されていた有田軍医少佐にソ連病院から迎えのジープが来て、盲腸の手術を依頼した。三十分ほどで済ませると、彼らは驚いていたそう。「驚くようなことではない、日本の医者なら誰でも朝飯前だ、あちらさんの女医の医学知識は日本の看護婦より劣る」と言っておられた。

間もなく熱も下がり、お粥が食べられるところになると、またまた検査検査の連続であった。この検査が種々あって、嫌な思いをした。

検査当日はほとんどの場合朝食抜きで、身体を固定され横転、反転、逆転、様々な角度から撮るレントゲンや、身体を輪切り状にして撮るCT、カメラを喉か

ら入れる内視鏡など、他にも沢山あったが、みな辛い思いを伴う検査ばかりであった。

入院も四カ月目に入ったころには、食欲も体重も入院前に戻り、あとは養生に専念して一日も早い退院を待つばかりになった。

突然の入院で中断していた戦傷病者の申請手続きを、病院のベッドで再開した。「あまり無理しないように」と婦長さんに言われながら、提出書類を整え、ある一日、主治医の外出許可をもらって広島県庁の援護課へ赴き、提出する全ての書類を見もらった上で不備の点などの指導を受け、復員時の本籍地の援護課へ転送してもらった。

本籍地では書類の点検整理をなし、不備の点があれば折り返し提出者に問い合わせがある。全て完了した時点で厚生省へ進達されることになる。厚生省では、担当官や審査医師により厳重な審査が行われる。審査期間に要する約一年間は、吉報を祈って待った。

退院後は仕事に復帰できない身体になってしまった。何しろちょっととした動きにも激しい動悸息切れが

する。小走りすらできないため、数メートル先の乗り物もやり過ぎて次を待つことになる。健常者と一緒には話しながら平地を五十メートルと歩けない。

坂道や階段は最も苦痛である、日常生活では洗顔、入浴、衣類の着脱など、全ての動作は緩慢でなくてはならない。好きな山の散策もできなくなった。今はTVで各地の山を見て我慢している。歌も歌えない。散歩も体操もできなくなった。

戦時中は相撲、柔道、銃剣道に励み、身体を鍛え、人一倍頑健な身体であった。シベリア炭鉱での苛酷な採炭、坑道掘削にも、ソ連人に混じって引けは取らなかった。歌の文句ではないが、「こんな身体に誰がした」と言いたい。

シベリア大陸にはご承知のように、無尽蔵とも言われる資源が埋もれている。無数にある鉱山の埋没資源も多種あって、石炭をはじめタンクステン、モリブデン、錫、鉛、銅、石英、珪石、雲母などなど、私も知らないこれら全てに含まれている恐ろしい毒素にも、それぞれ成分の違いがあって、冒されている珪肺症に

も各種あるように聞いている。

これらの採石、掘削を防塵装備も設備もなく、全くの無防備で就労させられた。粉塵も炭塵も体内に吸い込み放題であった。これがシペリア珪肺の起因となった。不幸中の幸いとも言いか、私の場合は単なる石炭鉱であったがため、石粉にも炭塵にも毒素は含まれていなかった。

会員の中には、毒素の多い鉱山で労役された方も多く、それがたとえ短期間であっても病状の進行は早く、多くの方が既に物故されている。例え軽症であっても長年の闘病で苦しみ、慢性化した後、死に至っている。

これらの鉱山に、ソ連囚人と同様に、私たち抑留者の労力も投入されていた。蝕まれた身体の病源がシペリアの労役にあって、しかも不治の病と知ったときは、心底スターリンを恨みに思った。

ソ連国民からも恐れられていた独裁者スターリンは、まさに私たち僚友にとっても病原菌そのものであった。劣悪を極めた食糧事情は栄養失調となり、死に

至らしめた。苛酷なるノルマは過労死を招き、三十八度以下の熱では休ませなかった非道は病状を悪化させた。二十代の若者でも、体力は老人のようになっていた。咄嗟に危険物を避ける機敏さも失われていて、多くの事故死または障害につながった。

少しでもいいから労役のノルマを軽減して、多くは望まないから食事を増量し、少しく医療医薬を整え、熱も三十八度なんて言わないで、もう少し休養させてくれていたなら、死者の数は大幅に激減していたであろう。

六十万を超える人々をはるばる自国へ強制連行して、動物の餌同然のものを少量与え、ノルマを課して長年無報酬で酷使したのである。いま財政難のロシアがこれを実施したとすれば、一躍して富める国になるであろう。如何程の額になるか、数字に強い人に一度試算してもらいたいものだ。

十月七日、ナホトカに下船、その夜は埠頭のコンタリートに震えながら寝た。翌朝、荷下ろしに一個大隊

と私が残され、三個大隊は内陸部へ先発して行つた。

「カマドの灰まで」という諺があるが、本当に根こそぎ船積みしているのには驚いた。

十月十日には、船から下ろした数十頭の馬匹に乗馬した数人のソ連兵と私は、スーチャンの収容所に来ていた。私の所属する第十一労働大隊は、スーチャンよりさらなる奥地「ザラトイ」と言う山間部落へ入っていた。迎えが来ることになっているから待つように、と指示があった。迎えに来たソ連兵は十代後半のお人よしの奴で、ウクライナ出身と記憶している。戦争も終わったので早く家に帰りたいと、懐かしそうに故郷の話をしていた。

所長は予備役の中尉で日本人嫌い、ザラトイは小さな山落で、森林伐採を主体に河川敷の工事、山林鉄道の整備などをやっていると話していた。道中退屈はしなかったが、とっぷり日が暮れて着いた。少々疲れた。

永井大尉は私の到着を大変喜んでくれた。早速翌日から、日ソ両将校と私の三人による各労役現場の巡回

が始まった。膝まで没する積雪の中で不良機材を使い、慣れない伐採作業をしている兵隊に、ソ連側は情容赦なくノルマを強要した。もちろん私も隊長に同調して、非情な奴らに対し叶わぬまでも抵抗を試みた。

一日が終わって帰ってくると、ペチカで沸かした湯を使い顔を洗い身体を拭く。隊長の背中中は私が拭いた。私の背中を大尉が拭いてくれるのには恐れ入った。繰り返しの辞退も「いいから、いいから」といったような人柄であった。幹候上がりの士官ではなく陸士出身であった、世が世であれば側へも寄れないのに。

木造平屋の一戸建てで二部屋あって、奥の部屋に隊長のベッドと机一つ、手前の部屋に私のベッドを置き、起居していた。夕食後はすることもなく、今日の反省や、これからの対抗作戦を話し合った。

雑談も一段落して、ぼつぼつ寝ようとしたとき、激しいノックと同時にドカドカと乱入者が。「何事」「誰か」。思わず身構えた一瞬、所長に突き飛ばされた兵隊が、既に立ち上がっていた私たちの足元によるけ

て、床に手をついた。興奮している所長は、大声の早口でまくし立てるのでさっぱり分からない。そうでもなくとも頼りない通訳なのに、少し間をとってゆっくり話すように言った。

よく聞くと、食糧庫へ盗みに入ろうとした兵隊を監視兵が見つけて捕まえたと言う。永井大尉にそのことを通訳すると、大尉は「こいつらの言っていることは本当か」と兵に問う。兵は「寝る前に用を足したあと、夜空の星を見上げてちよつと故郷を偲んでいただけです。それがたまたま食糧庫の前でした」。それを聞いた永井大尉は声を荒げて、「食糧庫の前に立っただけで盗みと言うのか」「夜はトイレ以外、外に出るはいかん」「そんなことは聞いていないから、兵には何も言っていない」、しばし喧嘩調のやり取りが続いた。それも、下手な通訳が間に入っている、一呼吸も二呼吸も間が空き、白け状態になってくる。この場合はこれが幸いした。所長の興奮も少し冷めてきたように見えた。

どうやら所長も監視兵も早とちりしたようであった

が、このまま引き下がっては沽券にかかわるとでも思ったのか、彼がいつも持ち歩いていた革の鞭を持ち直し、やにわに兵をビシッと打った。私は自分が打たれたように、全身にビリッと電気が走って顔から血の気が引いた。何とかしなくてはの思いだけが先走っていた。青ざめた顔で唇を噛み、これを凝視していた永井大尉は、私が動くより一瞬早くベッドの枕元にあった軍刀（入り当初、将校の帯刀は許されていた）を鷲掴みにするや否や、無言で所長の肩をボンと突き、間に割って入った。一大事と思った一瞬、兵の方へ向き直った大尉は「俺が斬る」と叫ぶや、サッと軍刀を抜き放ち大上段に振りかぶった。緊迫の極、私は「大尉」と大声で呼び捨てに叫んで飛びつこうとした一瞬早く、大尉のすぐ後ろに位置していた所長が大尉を羽交い締めにして、所長も顔面蒼白だった。ややあって大尉はおもむろに軍刀を下ろし、大きく息を吐くと、ゆっくりと鞘に納めた。

「ナガイ、後は勝手にしろ」と捨てぜりふを残し、所長は監視兵を促しそそくさと出て行った。彼らが去

った後も三人は肩を落として、しばし黙したままであった。間を置き、兵の肩に手を置いた大尉は「びっくりしただろう、これからも辛いことは度々あると思うが、日本へ帰るまでは頑張るんだぞ。いいな、大丈夫か?」「少し痛いですが大丈夫であります」

私は兵を見送る永井大尉の背中を、素晴らしい人だなあと思っ見ていた。「あんな奴に兵が鞭打たれるのを見てられなかった。絶対藤森が止めに入ると信じて咄嗟にあんな芝居をやったが、あいつが止めるとは皮肉なもんだなあ」「あいつも真っ青でした、根は案外小心者かも知れません。これから少しは態度が変わるでしょう」「肝の縮む大芝居をやったんだから、少しはいい変化があると良いが」

こんなことがあつて間もない十二月三日、私にスーチャンの收容所へ単身移動の指令が出た。永井大尉と別れるには忍びなかったが、我が意の通る筈もなく、辛いお別れをしてスーチャンへ向かった。

ザラトイもスーチャンも、否、シベリア中の收容所

はみな、ノルマの強要はするが、それに対応する機材工具の改善整備の要求は、一切聞き入れようとしなかった。

坑道掘削の現場で凄い地下水の落水と湧出の現場に直面していた。八時間の労役中、四、五人の兵は水に飛び込んだも同然の濡れ風。今までもあつた漏水現場の比ではない、雨具の支給は何度も申し入れていたが、例によって糠に釘、暖簾に腕押しであった。

この日は常々からたまつていたうっぶんがとうとう爆発してしまった。興奮して口角沫を飛ばし、日頃から我慢してきた彼らの非道を並べてなじった。暴言は言わずもがな、スターリンの誹謗にまで及んでしまった。スターリンを誹謗し、それに普段から争い事多く悪評高かつた私は、当然矯正收容所か刑務所送りになると思っていたが、政治部将校の裁決は驚くほど寛大なものであつた。通訳をやめて炭鉱へ入るようにと言われたときは、正直言つて驚いた。と同時にホッとした。単語並べの片言通訳で、双方の板ばさみになって辛い思いをするより、炭鉱で力仕事をする方が余程自

分の性に合っていた。

坑内で最も重労働とされる切羽での採炭と坑道の掘削を言い渡された。重労働でも体力には自信があった。それに坑内の作業は冬暖かく、夏涼しい。朝八時、夕四時、深夜十二時の三勤制で一週間交替になっていた。一台しかないおんぼろ昇降機で地下へ二百メートルほど降りると、数本の坑道が静寂の暗黒に不気味な口を開けている。いずれの切羽もみな四十五度以上の斜度がある。二十キログラムほどもある削岩機と、押し切りの片手鋸を肩から吊るし、ヘルメットに装着したライトを頼りに、採炭したあとの空洞化の急斜面に立ち並ぶ支柱につかまり、よじ登っていく。指示された切羽に登り着くと、地上のコンプレッサー（「石川島播磨重工謹製」のプレートがついていた）から送られてくる圧搾空気の本管パイプに接続しているゴム管の先端に削岩機の金具を装着して準備は完了。炭層の軟らかい層を探して、先ずそこへ削岩機を突き立て切り始める。

この採炭要領や坑道の掘削要領は、通訳をしていた

ころから親しくしていた監督に色々と教えてもらった。広い切羽に採炭夫は一人つきり、ライトを外して地面に伏せると、鼻をつままれても分からぬほど静寂の暗闇になる。

遠くで採炭している削岩機の響きが、まるで地鳴りのように不気味に伝わってくる。重い削岩機を片手で握り、振り回すようにして反動をつけ、繰り返し繰り返し炭層に突き立て石炭を切り落とししていく。ダッダッダッと大きな連続音が静寂の闇に響き、身体全体に振動が伝わる。バサッバサッと切り落とされた大小の黒い塊が漆黒の闇へ吸い込まれるようにドッドドッドと落ちていく様は、壮快そのものであった。だがそれも、日本で職業として働いている場合のことである、自らの意志でなく、抑留され強要されての労役では、論外である。

暗闇の中に一筋のライトに照らし出されて見えるのは、真っ黒な炭塵が宙に乱舞する不気味な光景、息詰まる思いがした。

終業時間前になると監督が回って来る。採寸して立

方を計算、立てた支柱の数と併せてその日のノルマの数字を出す。八時間の労役を終え、空気孔から地上に這い上がって澄んだ大気を吸い、腰を伸ばす。今日も無事だった。やれやれである。

坑道掘削のときは機材工具が変わる。「ブリ」削岩機より重い大型のドリルを使う。回転するドリルに打つ機能が加わったもので、ドリルの長さは一・五メートル前後、径はダイナマイトが入る大きさ。

とてつもなく硬い岩盤もあれば軟らかな岩盤もある。それぞれ開ける穴の個数、角度、深度、順序などを計算に入れてやらないと、発破をかけても多くの岩盤は飛ばない、従って深度も少なくノルマもあまり上がらない。この坑道掘削にしても要領を呑み込むまではなかなかノルマにならなかった。

岩盤に入るドリルの先端から鋭く吹き出る石粉は、ドリルを操作している掘進夫をまともに襲い、辺り一面たちまち真っ白にする。身体に伝わる振動は削岩機の比ではない。

切羽の場合は炭塵で真っ黒、坑道の場合は石粉で真っ白、口中は砂をかんでいる状態。膺うろの方までも侵入している。鼻孔にも粉塵が詰まるので時々取り出す。八時間、白い石粉や黒い炭塵をもろに吸いながらの労役であった。翌日の入坑寸前まで白い痰や黒い痰は薄れることはなかった。この状態が足掛け三年、スーチヤンを離れる前日まで続いた。身体に付着している白い石粉や黒い炭塵はシャワーで洗い落とすが、体内に侵入した塵はどうしようもない。現在の医学でも、肺壁に付着した塵の除去は不可能で、呼吸器疾患となり、万病のもとである風邪を引きやすい体質となった。

珪肺症は、肺炎、結核、肺癌、肺気腫、肋膜炎などを併発すると聞いている。生まれもつかぬ身障者となって一生を送ることになってしまった。異国に眠る御霊を思えばこのくらい……それでも、こんなに苦しいのなら死んだほうが……と思うこともある。

連合諸国は武装解除した後、速やかに復員させてい

るにもかかわらず、ソ連邦のみ、武器を持たない六十万を超える大多数をはるばる自国へ連行の上、人権を無視して、生きるための最低限のこともしないで酷使したから多くの犠牲者が出た。

さらに、衣料、食料はもとより、大きいものは、日本が技術を結集して建設した、東洋一と言われた満州吉林の豊満ダムを解体して、技術者も一緒に自国へ運び、小はドライバーからスパナ、ビスに至るまで根こそぎ自国へ持ち帰った。如何に戦勝国とはいえ、火事場泥棒そっちのけの強奪ぶりである。

スターリンが犯した、これら数限りない非人道的行為は、交戦中のことではない。これらの事実を咎める者がなげせないのだから。敗者となった日本は、半世紀を過ぎたいまも、交戦中の殺戮や慰安婦問題などの謝罪や補償の抗議を受けているのに。

衣食住は生きるために欠かせないもの。衣は、抑留中着たきり雀。食は、最低限をなお下回る。住は、これまた最低限を下回る。

武器も持たない衰弱した者を、銃で威嚇し、有刺鉄

線で囲い、自由を束縛し、ノルマを課して労働を強制し酷使した。人間としての最低限の価値さえ認められなかった。何故このような事実が許されたのか？

生還し得た私たちも、今は老いさらばえ、指折る余命となつてしまった。凍土に眠る御霊と一緒にって叫びたい。「口惜しくて、残念でならない」。シベリア珪肺の療友たちも、年々訃報の多きを聞くようになった。

一片の肉もとどめず、大空に碎けて散って逝った勇士の御霊。沖繩決戦に散って逝った十代の非戦闘員、ひめゆりの乙女たちの御霊。今日の日本の繁栄の基盤は、これら多くの尊い犠牲の上にあると思う。

戦争を知らない人の不様な謝罪は、靖国神社の御霊をはじめ、靖国に合祀されていない尊い多くの御霊をも犬死ににしたいのか。

私が叫んでいることは時代逆行なのか？

古い人間と言わりようと、

負け犬の遠吠えと言わりようと、

悔しいものは、悔しい。

残念なものは、残念だ。

【執筆者の紹介】

経歴

大正十三年二月二十一日生

昭和十九年十二月一日 満州第一五三五部隊に、現役

兵として現地入隊（白城子）。

齊々哈爾野戦航空修理廠（部隊名記憶せず）へ専科教育のため派遣される。

十月二日 ソ連貨物船に乗船、興南出港。

九、十、十一、十二の四個労働大隊、四千人。

昭和二十年三月

専科教育終了して原隊に復帰する。

新設部隊隼第八三三四部隊に転属を命ぜられる（四平街）。

北支派遣軍第五航空軍に編入され、北京郊外南苑に進駐する。

四月

南苑進発、朝鮮宣徳に移駐する。

五月

八月十八日 宣徳飛行場にて終戦、ソ連軍により武装解除さる。

九月二十九日 宣徳飛行場より行軍にて興安に至り、興安小学校に入る。

ソ連軍の指示により、第一労働大隊に編入さる。第十五航空通信隊、隊長永井中尉以下千人。

七月 ナホトカ港上陸、十、十一、十二の三個労働大隊は先発する。荷下ろし作業の九大隊に通訊として残る。

十五日 先発の永井大隊を追いザライの第五分所に入る。伐採作業。

十二月三日 スーチャンの通訳とし配置替

えされる。

四日 スーチャン第十一收容所第二

分所に入る。

昭和二十一年六月一日 スーチャン二十四、二十五番

炭坑にて、採炭並びに坑道掘

削作業に従事する。

昭和二十三年六月二十八日 炭坑作業終了の通告を受

ける。

三十日 スーチャンの收容所を出発

する。

七月十三日 ナホトカ港にて大郁丸に乗

船、出港。

十七日 舞鶴上陸、復員。

飛行兵（機関工手）。

〔終戦時の職名〕
最も長くいた收容所名 スーチャン市第十一收容所第

二分所。

（広島県 山田 浩造）

公主嶺からタシケントへ

広島県 小松崎 利作

緑の街公主嶺、それは楽園そのものであった。昭和二十年七月頃から、平原の彼方にのろしが上がるようになり、衛兵勤務の歩哨が増強された。そして八月九日未明、「ソ満国境で日ソ交戦状態に入る」の報である。在満各航空隊より教育のため派遣されていた教育生の見習士官、少尉候補生、下士官候補者、甲、乙幹部候補生、特別幹部候補生などが続々と原隊に向けて出発していった。「戦場で会おう」の合言葉のもとに。だが、その装備は乏しく、三八騎兵銃が唯一の武器であった。

ソ連軍は大戦軍群を先頭に、はや白城子を突破している……との情報が入る頃、原隊に復帰すべく出発していった教育生が続々と教育隊（通称、公主嶺教育隊、関東軍第二航空軍第一教育隊、満州第一六六一三